

ベンジャミン・A・エルマン

「感情的苦悶、成功への夢、試験生活」(中)

(『帝政後期における科挙の文化史』第六章)

高 津 孝 訳

本訳文は、Benjamin A. Elman, *A Cultural History of Civil Examinations in Late Imperial China*. Berkeley: University of California Press, (2000) の第六章の翻訳である。

第六章「感情的苦悶、成功への夢、試験生活」は次の四つの節によって構成されている。

前文

一・宗教と、科挙の通俗的維持安定策 (前回)

(一) 通俗民間伝承と宗教

(二) 科挙予言のための技術

二・明代状元の夢と抱負 (今回)

三・科挙における古い技術に対する抵抗 (以下、次回)

(一) 一五五八年(嘉靖三十七年)順天郷試と自然の変則に対する解釈

(二) 科挙における運命の予言に対する清朝の観点

四・失敗に対する二者択一の反応

(一) 疎外された蒲松齡と科挙生活

(二) 洪秀全と科挙についての対抗的未来像

二・明代状元の夢と抱負

上記のように、おそらく中国では古代よりこの世とあの世との間のコミュニケーションの最も代表的な形式は、夢であった⁸⁹。中世中国で普通のことであった⁹⁰科挙受験生の夢における「占夢」(夢の解釈)と「兆」(前兆)の観察は、明代で広く報告される洗練された文化的形式となった⁹¹。明の初代皇帝朱元璋でさえ、かれ自身の夢の一つを記録した(「紀夢」)が、それは彼の帝国の記録中に集められている。夢の中で朱元璋は皇帝になる前の一年間の自らの人生を再体験したが、そこには彼の軍事力のもとで中国を統一するよう彼が運命づけられているという幾つかの前兆が存在していた。朱元璋の成功の前兆は、それらが通俗宗教や知識人の人生の中で述べられているように、彼の夢の中で述べられた。最初、仙人より送られた一羽の仙鶴が朱元璋の夢に現れ、彼を仏教の守護者と道教の聖職者の幻影へと導いた。聖職者は彼に深紅の礼服と一本の剣を与えた。彼らはそうして彼に昇進することを告げた。夢

89 姚偉鈞『神秘的占夢』(広西人民出版社、一九九一年) pp. 3-18。宋代科挙の夢については、Chaffee, *The Thorny Gates of Learning in Sung China*, pp. 179-80を見よ。

90 劉文英『中国古代的夢書』(北京、中華書局、一九九〇年) pp. 1-65。Roberto Ong, *The Interpretation of Dreams in Ancient China* (Bochum: Studienverlag Brockmeyer, 1985), pp. 8-46を見よ。また、Carolyn Brown, ed., *Psychology: The Universe of Dreams in Chinese Culture* (Lanham, Md.: University Press of America, 1988) を見よ。

91 Lien-che Tu Fang, "Ming Dreams," *Tsing Hua Journal of Chinese Studies*, n.s., 10.1 (June 1973) : 61-70。

は、実際に農民の少年の立身出世物語を正当化した。彼は、より暗いあの世によって、目に見える世界における新しい「輝く」(明)王朝の創始者となるように指名されたのである⁹²。科挙体制という巨大な精神的物理的圧力の下で、そして、彼らにとっては、その「文化的囚人」状態のもとで、生み出された、帝政後期知識人たちの人生における懸念の無意識的な反映として、帝政後期知識人が夢に投影したビジョンは、彼らがそれを思い出した時に、易者、予言者、シャーマン、そして仏教と道教の僧侶によって解釈されるための言語や視覚的イメージを通じて、我々に、彼らの精神的世界を測定するためのユニークな窓を提供してくれる。科挙にとつての夢というマーケットは、一つの宗教的形式としての「睡眠瞑想」を含むが、科挙マーケットの社会的、政治的ダイナミクス(原動力)を伴った文化的構築物の忠実なレプリカであった⁹³。しばしば、これらの交換は、個人的な利益と損失に帰着するが、ユーモラスな形で表現された。

例えば、詩人であり書家である何紹基(一七九九—一八七三)は、一八二〇年の北京の会試の前に何度か夢を見ている。その夢の中で彼は多くの「マントウ」(蒸しパン)のある市場に到達した。食べるために

92 『明太祖御制文集』16:8a-14bを見よ。また Romeyn Taylor, "Ming Tai-tsung's Story of a Dream," *Monumenta Serica* 32 (1976) : 1-20を見よ。

93 Michel Strickmann, "Dreamwork of Psycho-Sinologists: Doctors, Taoists, Monks," in Carolyn Brown, ed., *Psycho-Sinology: The Universe of Dreams in Chinese Culture*, pp. 25-46; Russell, "Chen Tuan at Mount Huangbo," pp. 122-123を見よ。また Kathleen Kelleher, "Seems Taking a Final Exam Is Everyone's Worst Nightmare," in *Los Angeles Times*, Tuesday, May 28, 1996, E-1 and E-4; 見よ。

一つを選んで食べ終わった後、彼はもう一つ手にとった。その時突然見知らぬ人が近づいてきて、それを彼から盗んだ。その後、何紹基はマントウ泥棒が外でもない一八二〇年の状元・陳繼昌であったことを知った。陳繼昌は我々が見たように(前述)、郷試でトップ合格したのち名前を替え、それによって、殿試と会試の両方でトップ合格することを確信していたのである。何紹基は、夢が示唆したように、自らが好敵手を得たことを理解した。何紹基は一八三五年の郷試でトップ合格した。この試験は彼が夢で食べたマントウに値したが、一八三六年の会試と殿試では、彼は陳繼昌の「三元」という偉業(「守叡」という名で解元、「繼昌」という名で会元、状元)を再現することはできなかった。二番目のマントウは陳繼昌に行ったのである⁹⁴。

古代より、漢民族は夢を精神世界からのメッセージと見なしてきた。夢は、運命の予言、扶箕(自動書記)、風水、人相学、そして、その世界とコミュニケーションする書かれた言葉に対する解説を補完した⁹⁵。夢のために祈り(祈夢)、「睡眠瞑想」に参加することは、夜間に寺院を訪問する人々にとつての一般的なゴールである。祈願者によって祈願された寺院の夢は文昌帝、関帝、もしくは他の神々、そして、特定の寺院

94 『清稗類鈔』74.109。ここでは陳繼昌が合格した郷試の年は一八一九年であるが、より早くpp.74.54におけるように、一八一三年は陳繼昌の達成に對して挙人が与えられた年である。科挙から奇妙な物語やユーモラスなアネクドットを集めた最近の選集としては、王志東『中国科挙故事』(台北、台湾漢欣文化出版公司、一九九三年)を見よ。pp.212-86は明清王朝を取り扱っている。

95 姚偉鈞『神秘的占夢』pp.19-35は、中国の古代からの夢解釈に使用された主要な技法について議論している。

に結びつけられた名士たちと意思を通じ合う最良の手段であると考えられていた。たまに、催眠術は「凶夢」（夢を凶にする）し、人々が夢のビジョンの中で見たというものの意味を解明するために追加される。例えば、迫害された明の宰相・于謙を祀る杭州の廟（于謙祠）は、睡眠瞑想と夢の孵化のセンターとなり、二〇世紀まで続く科挙の伝統となり、そして、于謙祠が杭州に再建されている二二世紀においては復興があり得るものである⁹⁶。治療上の仕掛けとしての夢は、一般的に科挙マーケットの外で治療の象徴と健康の回復として使用された⁹⁷。例として、『夢占類考』（夢の解釈についての分類された研究）と題する夢占いのコレクションを編集した張鳳翼（一五二七—一六一三）を見てみよう。彼は、会試に失敗した一五六五年の北京への旅行から戻り、傷心が回復したのちも、意気消沈して、酒を飲むことに傾きがちで、ずっとひどい病気のままであったが、一五六七年に、道教一派である全真教の八仙を訪問するという夢をみた。夢の中で、呂洞賓は張鳳翼の脈を取り、彼に白い薬を与えた。それはやがて彼を助けて病氣から回復させるものであった。張鳳翼は会試に四度も完敗し、そして隠遁して彼の出身地である蘇州で安逸の中、戯曲を描くという健康的な生活を送ることになった。夢占いについての彼のコレクションは、彼が一五六五—一六七七年の間の

96 『清稗類鈔』73.55。また、Ong, *The Interpretation of Dreams in Ancient China*, pp. 36-46; and Richard Smith, *Fortune-Tellers and Philosophers*, pp. 245-46を見よ。

97 夢の治療的役割については、C. G. Jung, *Dreams* (Princeton: Princeton University Press, 1974), pp. 39-41, 73-74を見よ。ユングはこのことを「靈魂の償いのプロセス」と呼んだ。

彼の苦しい試練に基づいている⁹⁸。『夢占逸旨』（夢の解釈についての残存する要点）と題された陳士元の編集による書物は、歴史的に詳細な記述を伴って、帝政中国における夢の解釈についての二つの主要な伝統を説明した。すなわち、（一）「兆」（予言）についての夢と（二）「幻」（幻想）についての夢である。科挙マーケットにおいては、文学世界とは異なり、夢は主として別世界とのコミュニケーションの形式として機能した。異なっているのが、夢と「覚」（意識的知覚）とは、運命と予知に対する「知」（人間の知識）の一助となる理解の形式であった。陳士元の観点では、「科甲爵品は前兆有らざるなし」（すべての試験の成績と官品には早期の吉兆がある）となる。彼はその時、科挙での成功のめづる予兆としての夢についての、唐代から明一代までの書かれた証拠を探し出した⁹⁹。例えば、世評によれば、少なくとも五人の明朝皇帝が、殿試において状元を選ぶのに夢に拠った。一三八五年、洪武帝は、彼自身の有名な夢は権力への宿命的上昇の自伝的記述として記録されているが、釘と糸とを夢に見たことで、丁頭を状元として選んだ。その理由は、（一）丁頭の姓は釘の漢字音と同音であり、（二）糸（絲）の漢字は丁頭の名「顯」の一部を構成するものであったからである¹⁰⁰。伝えるところでは、

98 張鳳翼「序」（『夢占類考』萬曆十三年王祖嫡刻本）pp. 1a-bを見よ。また、Lien-che Tu Fang, "Ming Dreams," pp. 59-60。Ong, *The Interpretation of Dreams in Ancient China*, pp. 165-66を見よ。

99 陳士元『夢占逸旨』（百部叢書集成・芸文印書館、一九六八年）1.1a, 1.5a, 1.6a, 6.1a-7a, 8.9a—11b。自序は嘉靖四一年（一五六二）。

100 『狀元図考』1.5b。また、Lien-che Tu Fang, "Ming Dreams," pp. 60。Rudolph Wagner, "Imperial Dreams in China," in Carolyn Brown, ed., *Psycho-Sinology: The Universe of Dreams in Chinese Culture*, pp. 11-24を見よ。

一四二一年には、永楽帝が殿試の前に道教の仙人のシンボルである鶴を夢に見た。この前兆に基づいて、彼は曾鶴齡を状元に選んだ。というのは、曾の名前が鶴の字を含んでいたからである。

その後、一四四八年、正統帝は殿試の前に、儒者と道士と仏僧に会う夢を見て、合格者の知的背景に基づいてトップスリー（状元、榜眼、探花）の進士を選んだ。状元の彭時（二四一六―七七五）は世襲の知識人家族（儒籍）出身として登録されていた。榜眼の陳鑒（二四一五―七二）はかつて道観の音楽の学生だったことがある。そして、探花の岳正（二四一八―七二）は仏寺に仕えていた。一五四四年には、嘉靖帝が、雷鳴を聞くという夢によって名前に「雷」字を有する候補者を選んだ。浙江出身の秦鳴雷（一五一八―九三）は、その夢の受益者であった¹⁰¹。

現世の皇帝とあの世の神々や幽霊との間の交流を語る言説については、皇帝の夢を検証することは不可能であった。多くは、皇帝のでっち上げであり、その他は、支配者のせいになされた。しかし、でっち上げであってさえ、その夢は歴史的な出来事を利用し、それらを語られた教訓話へと練り上げる文化的な根拠を表象していた。例えば、于謙は彼の流刑にされた妻の面前に幽霊として出現し、彼が皇帝の面前に正常な姿で出現し、彼の事件を申し立てることができるように妻の両眼を借りたいと頼んだと伝えられている。翌朝、于謙の妻は失明したが、一方、于謙自身は皇帝の面前に、宮殿に突然起こった火事の最中にいるイメージで出現した。不当な措置が一四五七年に于謙に対して行われたことを理解して、皇帝は于謙の妻に謝罪した。しかし、それは明らかに間違った夢

101 『状元図考』121b、『制義科瑣記』139⁶、そして、『前明科場異聞録』A45a-b。

また、Lien-che Tu Fang, "Ming Dreams," pp. 60-61を見よ。

であった。すなわち、成化帝は彼女に謝罪することはできなかったであろう。というのは、于謙の妻は、流刑が言い渡される数年前にすでに亡くなっていたからである。皇帝は于謙の名誉を回復させ、于謙と同様に一四五七年に犠牲者として殺された王文（一二九三―一四五七）の息子に一四六五年の科挙の受験を許した（第八章を見よ）。しかしながら、その夢のでっち上げは確かにその政策的決断の説明となっており、そして、于謙に対して行われた過ちを正している。このように、夢は我々にとって、物事はどのように理想的に現れるべきであったかについての虚言として、歴史的に有用である¹⁰²。

我々はまた、夢の解釈が明代のすべての状元の半分以上のものの人生において重大な役割を演じたことを知っている¹⁰³。夢は、「図」とすることが可能で、人の性格と行動を理解し、彼の運命を予知するために分析可能な、他の世界に対する人間の「象」（対になるもの。第九章を見よ）として解釈される。例えば、『明状元図考』は、一三七一年から一五七一年にかけての状元の夢を図示し、議論したコレクションである。それは、最初に顧鼎臣（一五〇五年の状元、上記参照）によって編纂され、彼のひ孫である顧祖訓によって継続して編集された書物で、すべての明代状元のあらかじめ定められた運命の達成を再録したものである。呉承恩と程一楨が後に、一六〇四年までの状元の記事を含む材料を加え

102 Lien-che Tu Fang, "Ming Dreams," pp. 69-70、と Hegel, "Heavens and Hells in Chinese Fictional Dreams," pp. 1-10を見よ。

103 中国の歴史におけるすべての状元についての夢の物語と逸話に関する最近のコレクションについては、鄒紹志、桂勝『中国状元趣聞』（台北、漢欣文化事業公司、1993年）pp. 1-144「明代以前のカバーストーリー」を見よ。

た。この準公的な著作には、後の版も存在しているが、一六〇七年版は、明の翰林学士である沈一貫（一五三二—一六一五）による新しい序文が施され、栄えあるものとされた。沈一貫は序文を付すことで、本書を、明代に流行していた、偉大な人物の、成功を夢に見たという受け入れ可能な伝記的記録として認可を与えたのである¹⁰⁴。

このような成功を予告する夢は、様々な書物に記述され、そして、夢を身体が眠っている間に心から抜け出た意識のビジョンとして図示的に描写するというユニークな明代の版刻において図解された¹⁰⁵。小北斗星のような星座のサイン、犬の肉のようなめでたい前兆、そして、珍しい暗合が、明代の信念に流れ込んだ。その信念とは、休息している精神は、視覚的イメージやシンボルの文化的マトリックスを編み上げる傾向があるというものであり、視覚的イメージやシンボルの表層は、それらが含意する明白な内容のために学ぶことができるものである。これらの夢のビジョンは、歴史的構築物として、その謎が解読を必要とする実際の夢としてではなく、解釈されるかもしれない。すべての夢は、その夢が夢みられた時、場当たり的な構築物として現れ、内容の明白な夢ではないようである。夢の謎に対する明代の説明を、このような夢とその文化の解釈が科挙マーケットの中でどのように機能したかを知るための分析対象とすることは、価値あるものである¹⁰⁶。

104 『状元図考』の凡例pp.1a-bと沈一貫の序文pp.1a-bを見よ。また、『状元図考』と呼ばれる沈一貫の版本についての議論については上述注60及び第七章の明代の出版についての議論を見よ。

105 Judith Zeitlinは、彼女の著書 *Historian of the Strange*, pp. 137, 173において、夢を「夢の泡」としてイラストするこの木版技術について記述している。

106 『状元図考』の諸所に見られる。

我々の目的にとって、この文化的マトリックスの「明白な内容」は、部分的に、受験生活が必然的に伴う男性の苦悶と、それを動機付ける心理学的緊張によって導かれたものである。状元の「潜在的な夢の思考」は、常に、明代中国に特有の明白に文化的な言説の中で暗号化され、転移され、修正され、そして、歪められたために、我々にとって決して分かりやすいものではない傾向があるが、我々は、そのような夢を見たとき主張する男性たちと家族の心理学的構造と彼らの社会的体験、圧力の間の相互関係のいくつかの外面的側面について、謎を解読し始めることができる。それらの抑制と昇華は、今日我々が直感的に理解できるものとはかけ離れている。なぜなら、それらの思考に対する彼らの意識的な受容と拒否の文化的な用語は、我々の時代ではなく、彼らの時代によって定義されているからである。確かに、彼らの心的な意識の流れを「流れ」「抑圧」または「昇華」と呼ぶことは、時代を超えた、文化から文化への、人間の営みの意識的、無意識的内面化において歴史的变化を加えられた、明代の知識人についてよりも我々自身についてより多くのことを教えてくれる¹⁰⁷。それにもかかわらず、彼らの図像的に記録された「夢のビジョン」を通じて、我々は幸なことに二度と一字一句変えることなく再現することはできない、試験場個室の中で前近代の試験のヘトヘトに疲れる

107 「人間の営みの歴史化」については、ニーチェ『道徳の系譜』(Friedrich Nietzsche, *On the Genealogy of Morals*, translated by Francis Golffing (Garden City, N.Y.: Anchor Books, 1956)) の諸所及び『善悪の彼岸』(Friedrich Nietzsche, *Beyond Good and Evil*, translated by Walter Kaufmann (New York: Vintage Books, 1966)) のニーチェ序文を見よ。また、ユング『夢』(Jung, *Dreams*, pp. 71-72) における、夢の中で作られた連想を確定するために「文脈を取り上げる」ことについての議論を見よ。

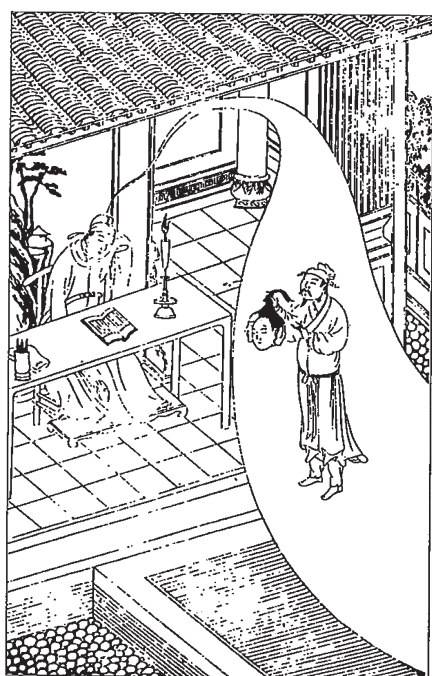


図6.4 三つの首の出現（1445年（正統10年）商輅の夢のビジョン）：顧鼎臣、顧祖訓編、1607年（万曆35年）刊『明状元図考』

日々を彼らが送った時、何が彼らの心を苦しめたかということについての生々しい感覚を確かに我々は得ることになる¹⁰⁸。

図6.4は、『明状元図考』のために黄心澄によって準備された明代後期の木版画である。ここでは、三つの人頭が一四四五年の夢のビジョンに出現する。この絵は、ある夢、実際には「白昼夢」を表象している。そ

108 Abell, *The Collective Dream in Art*, pp. 62-70. 「ある願望についての達成感を得ようとする企み」としての古典的な、そしてそれは極度の単純化されたものかもしれない夢の例は、飢えているときに食べ物を見ることであるか、もしくは、喉が乾いたときに水を夢に見ることである。フロイト『続・精神分析入門講義』（Sigmund Freud, *New Introductory Lectures on Psychoanalysis*, translated by James Strachey (New York: Norton, 1964), pp. 7-30). 特に「フロイトを『夢とオカルティズム』の議論へと導いた、「心的消耗」という症状を呈した博士号試験を準備している学生の治療に関する文章pp. 43-44を参照のこと。

れは、伝えるところでは商輅（二四一—一八六）がおそらく一四三五年より以前のある時、「学舎」（家族の書斎）で古典を学習している青年時代に見たというものである。その絵に付されて刊行された文章によると、商輅の先生である「洪士」という名の男がその部屋で彼と一緒に生活し、彼の科挙受験の準備を助けていた。書斎の上品な道具立て、清潔な勉強机には、すべての書道家に要求される筆記用具が完備している（第五章を見よ）。そして彼が住み込みの家庭教師を有しているという事実は、すべて商輅の浙江の一家がかなりの資産家の一つであり、彼に古典的学习に専念するのに必要な時間と文化的リソースを与えることができたことを示している。これは、貧しい身から出世した人の物語ではない¹⁰⁹。

しかしながら、図版の中では、商輅は熱心に勉強しているように描かれていない。熱心な勉強は、古典的教養と未来の科挙における成功への道における心的準備の一般的なイメージであつたであろうものである。事実、彼は勉強中に眠っているように描かれ、彼の先生は不在であり、商輅の頭から、一人の男が髪の毛で一つに縛られた三つの人頭を掴んでいる夢のビジョンが放射されている。その男はその三つの頭を商輅に贈呈するのである。我々は今一步、「三つの頭」と「三元」（郷試、会試、殿試の全てにトップ合格した者）との間の重なりについて探究すべきだろう。それらは中国語においても、英語においても、構造的に一致する。興味深いことに、夢の中で用いられた頭に対する中国語の単語は「頭」ではなく、「首」であり、両者は、最初にやってくる、トップである、

109 商輅の人生については、『明史』7/4687-91と *Dictionary of Ming Biography*, pp. 1161-63を見よ。

もしくはリーダーに関連する概念を描写するのによく使われたものであるが、ここでは身体に接続する頭部のより肉体的イメージである「首」が使用されているのである。それゆえに、それは血みどろのシーンでもなく（例えば、血は全く描写されない）、即時の榮譽を引き起こすだろうものでもないが、それにもかかわらず、三つの身体を欠いた頭が、多くの他人に打ち勝って勝利するだろう商輅にトロフィーとして贈呈されているのである。商輅は、穏やかに休息しており、そのため、我々はこれは願望に基づいた夢であり、あからさまな苦悶もしくは罰によって直接に追い詰められたものではないと確信するのである。

しかしながら、明らかにその賞金は極めて高額で、そして肉体を犠牲にするという幾分か的感覺が、ミステリアスな男によって三つの頭が片方の手に掲げられているという強烈なイメージによって放射されている。我々は、学生ではなく、帝政中国の武人が例によって彼らの敵の頭を切断し、それらを彼らのリーダーに、戦争における全体的勝利を確認するためのトロフィーとして贈呈すると根拠なく推測するかもしれない。もしくは、我々は、斬首が、もし万一犯罪が「より軽微な」ものとは対照的に「重大な」ものであると裁定されたならば、それは、絞殺による、もしくは切り刻まれることによる死を必然的に要求するものとなるだろうが、明王朝の法典が死に値する事件において強制する法律的基本準であることを心に留めるかもしれない。おそらく、商輅の夢に対する軍事的そして法的な解釈は、そこでは競争して勝利することが他者の敗北を意味するという科挙マーケットを喚起する点で、夢そのものといくつかの極めて限定された関連性を有している。しかしながら、夢の潜在的な特質について我々により多くのことを告げてくれるだろう詳細な情

報を欠くために、我々は、明代後期の編集者によって絵画化されたような穏やかで明白な内容を抱くに至るのである。それは、明代文化の標準からすれば、明確に人を悩ませる夢ではない。そして、我々はそこに血と血糊を読み込みすぎるべきではない¹¹⁰。

目覚めた時、商輅は直ちにその夢の明白な内容を彼の先生に語った。先生は、勉強中に居眠りをしたことで彼を叱るところか、彼にそれは「吉夢」であると告げた。「人首三顆」（三つの人頭）は、科挙の受験生としての商輅の人生の未来に向けたビジョンである。もちろん、後知恵によって、夢をその表面上の意味において解説することは十分にたやすい。商輅の予知された成功は、彼が二十一歳のときに、一四三五年の浙江の地方試験を第一位で合格したとき確証となった。彼は十年後、第一位で首都の試験に合格し、そして、一四四五年の殿試で状元の名を得ることによって、彼の「三つの頭」の最後を得た時、その予言をやり遂げた。商輅は、この点で明代の科挙において三元を達成した唯一の知識人であった。一人の試験官としての彼自身の影響力によって、商輅は他の向上心に燃える挑戦者の王鏊（一四五〇—一五二四）がその偉業を再現しないように配慮したのだろう。そして明代では商輅だけがこの排他的な科挙の高みを達成したのである（第七章を見よ）。

特定の問題についての合理化としての、後知恵に基づく解釈によれば、商輅の夢は、彼の成功を運命の自然な結果として提示する。このような前例のない成功を達成するために要求される勤勉さと古典の暗記は、名声と富と高い政治的役所へのスムーズな道のために考慮の外に置かれ

110 Bodde and Morris, *Law in Imperial China*, pp. 133-34, 552.

る¹¹¹。しかし、より歴史的に解釈すると、商輅が一四三五年の地方試に合格した後、彼がおそらく一四三六年、一四三九年そして一四四二年の首都の試験を失敗した時、彼が持った無視できない不安が何であるはずであったかを、この穏やかな夢は隠蔽している。一四三五年には彼は二〇歳を超えていたことを考慮すれば、商輅もおそらく浙江の極めて競争率の高い地方試に二回失敗しており、首都の試験を加えると三回失敗していたことになる。大抵の受験生のように（第五章参照）、その時、商輅は、誰もが切望する進士の学位を得て官僚となるため、三十代まで待たねばならなかった。

失敗が記録に加えられるとき、予知された成功の物語はより一層疑わしいものとなる。暗記に費やされた子供時代（例えば、商輅は『尚書』を得意とした）の数年間、そして書齋で広く勉強し科挙エッセイを練習することに費やされた青年時代は、忘却されている。実際のところ、一四四五年の科挙についての首都の記録は、商輅の八股文が特に傑出したものではなかったことを示している。『四書』についての彼の三つの八股文はそのどれ一つも最も優れた文章には選ばれなかった。『尚書』からの引用についての彼の四つの八股文のうちたった一つしか最も優れた文章には選ばれなかった。商輅は第二場において最良の論と表を書いたことで名を揚げた。そして第三場における彼の策問の一つも、策問中

111 Shuang [Shang] Yen-liu 商衍鑒, "Memories of the Chinese Imperial Civil Service Examination System," p. 52 を見よ。ここでは勤勉さについて次のように述べられている。「實際上、人が中断することなく毎日勉強する限りは、これは「すなわち、極めて大量の暗記」は達成されるだろう。―それについては何の不思議なことも奇跡的なことも存在しない」。



図6.5 馬に乗った両頭の人の出現（1583年（万暦11年）朱国祚の夢のビジョン）：顧鼎臣、顧祖訓編、1607年（万暦35年）刊『明状元図考』

の最良の作品として選ばれた。明代後期の観衆にとって、単一の夢のビジョンが、これら数時間、数日、数ヶ月、そして数年にもわたる勤勉な学習にとつて変わり、商輅が大変幸運にも勝ち取った高い名誉を求めている競争の息苦しさを無視することになった¹¹²。

一五八三年の状元である朱国祚によつて記録された類似の夢は、図6.5における夢のビジョンとして描かれている。『状元図考』の明代後期の編集者たちは、彼らの注釈において、若い受験生の朱国祚が通州での地方試から家に帰る途中、一人の友人が彼を船に招き宴会を始めたことを記録している。途中の渡し場で、その友人は朱国祚を遊女のたくさんいる酒屋に引つ張り込んだ。驚いた朱国祚は、酒屋の門を走り出て、止まることなく歩いて二〇里離れた通州に戻った。その後、朱国祚が地方試を受験した時、彼は書齋で夢を見た。それは商輅と同じく白昼夢で、そ

112 『明代登科録彙編』巻一「会試録」（一四四五年）十四表を見よ。

の中で馬に乗った両頭の人が彼の前に現れた。朱国祚は、これは奇妙なことであると思ったが、夢の中で彼は、両頭の人物の前に出るために自分の乗った馬を駆り立てた。

朱国祚が実例で明らかにした有徳の行為は、彼が経験した夢のビジョンのための道徳的背景になっていた。その夢の現実の意味は、殿試のランキングが出るまでは明らかではなかった。朱国祚は地方試でも首都の試験でもトップを取れなかった。そのため、彼の状元としての地位はただ「一つの頭」に等しいものであった。しかしながら、地方試と首都の試験で共にトップを取り、そのため「二つの頭」を持つ男であった李廷機に優って殿試を終了したと朱国祚が理解した時、その夢の明白な意味が明らかになった。夢の中で李廷機に先んじて通り過ぎることで、朱国祚は、名誉となる「三元」(二つのトップ)を有する一人の男に先んじて試験を終了することを確信した。「一つの頭」は、少なくともこのケー

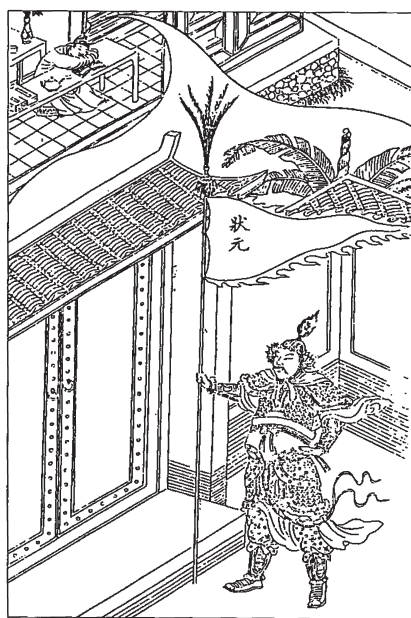


図6.6 精霊が状元を報告する(1454年(景泰5年)孫賢の夢のビジョン): 顧鼎臣、顧祖訓編、1607年(万暦35年)刊『明状元図考』

スでは二つよりも良いものとなるのである¹¹³。

明代の状元に典型的な夢は、編集者の宗教的信念が反映したものであるが、殿試で一番になるという願望充足の夢であった。例えば、図6.6においては、一人の精霊が夢のビジョンの中に現れ、彼の家の門のところ、将来の一四五四年の状元である孫賢に対して予告を行なっている。一方、孫賢は、快適な書斎の中の机の上で、近くに茶杯、茶瓶を伴って、本に覆い被さるように居眠りをしている。その伝令官は、状元の文字の入った黄色いペナントを掲げており、彼は公に「金榜」(最終順位リスト)を公表することに責任を持つ人物の正式な官服に身を包んでいる。編集者たちは、我々に対して、孫賢の成功も、それに連想によつて結びついたりいくつかの吉兆の夢を持っていたことを告げている¹¹⁴。

同様の願望充足の夢は、多くの明代の状元もしくは彼らの一族のメン

113 『状元図考』3.33 a-34a。
114 『状元図考』2.11b-13a。



図6.7 天の門に入る(1544年(嘉靖23年)秦鳴雷の夢のビジョン): 顧鼎臣、顧祖訓編、1607年(万暦35年)刊『明状元図考』

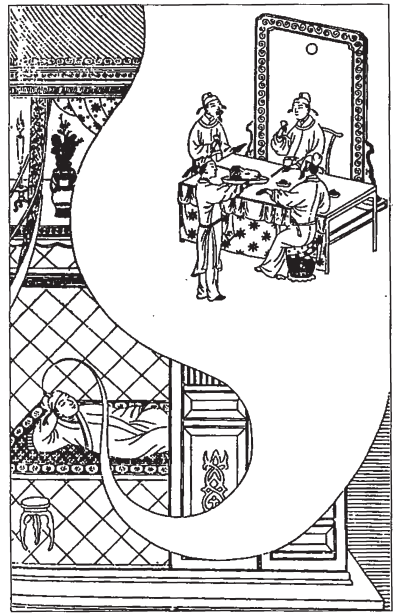


図6.8 羊の頭を送る（1451年（景泰2年）柯潜の夢のビジョン）：顧鼎臣、顧祖訓編、1607年（万暦35年）刊『明状元図考』

バーによって報告されている。秦鳴雷は、彼が一五四四年の状元になる以前、「天門」（天上の宮殿の門）を襲撃する夢を何度も見た。図6.7は、秦鳴雷が白昼夢を見ている、河と山を見下ろす上品な田舎の四阿の二階から放射する夢のビジョンを示している。夢の中で彼は、高い壁の都市の閉じた門に向かって、上方へと自分の馬を鞭打っている。科挙は普通、官僚の世界の門に入る手段として見られている。しかし、秦鳴雷の夢はそこに皇帝が居住する、城壁で囲まれた帝都に入ることを禁じている門に向けて明確に指向されている。状元としての彼は、その門に意気揚々として入り、そして翰林学士として宮廷で仕えることになるだろう。この夢の別のバージョンは、一四七二年の状元である呉寛（一四三六—一五〇四）が殿試の前に夢見たものである¹¹⁵。

豪華な食事や金持ち、権力者との親しい交際は、受験生たちの夢のま

115 『状元図考』3.12b-13bを参照せよ。「龍の頭」「龍神」も同様に、一四七八年（3.24b-25b）一五二六年（3.4a-b）の状元のための吉兆の夢の中に現れた。

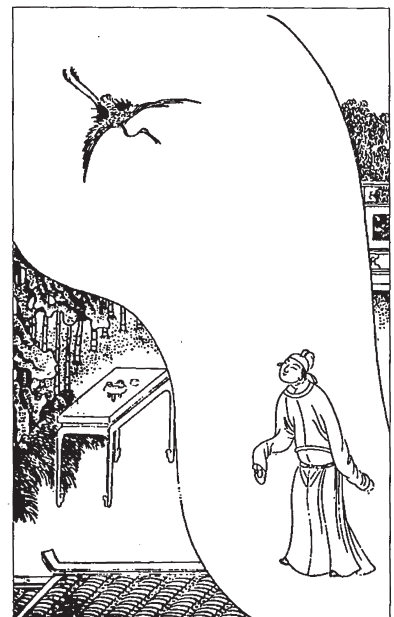


図6.9 黄鶴の出現（1505年（弘治18年）顧鼎臣の夢のビジョン）：顧鼎臣、顧祖訓編、1607年（万暦35年）刊『明状元図考』

た一つの特徴である。図6.8は、柯潜（一四三—一七三）が自宅の祭壇の正面のカーペットで眠っているところを示している。彼は、彼自身が寺院で、テーブルの上座に座らされて友人たちと食事をしているところを夢に見ている。幸いなことに、彼の友人の一人が「羊頭」を珍味のひとつとして贈呈している。「拆字」（書かれた言葉を解釈する技術）を用いて、その晩餐会に出席した人々は、これが柯潜のために何を予言しているのかを巧妙に明らかにしている。十二の天上の幹と、一〇の地上の枝を用いて時間を跡付ける六〇日の太陰周期に従うと、一四五一年は「辛未」の年として知られている。羊の図は、六〇日周期における「辛」字の下部に似ている。一四五一年は羊の年である。しかも、頭それ自身はその年にトップで合格することを意味している¹¹⁶。

願望充足の夢は、しばしば庶民文化、宗教に結び付けられたためだ

116 『状元図考』2.10b-11a。また、一五四七年の状元に名誉を与える食事の描写については、『状元図考』3.14a-15aを見よ。

前兆を示した。それは、彼ら一族の受験生と構成員の希望と抱負を確認するものであった。一般的に、このような夢の中で描写された前兆は、地元の小な宗教的祠もしくは名士たちや神々についての道教と仏教の万神殿に由来する単刀直入なシンボルであった。『明状元図考』の編者の一人である一五〇五年の状元の顧鼎臣が『明状元図考』（明代の状元の夢のコレクション）中に含めた夢のビジョンは、「黄鶴」が顧鼎臣をよく見るために舞い降りたという夢であった（図6.9を見よ）。鶴は、道教に關係するめでたい鳥であり、父子關係をも象徴した。顧鼎臣は誠実に毎晩、父に敬意を表し長寿を願って焼香していた。顧鼎臣が生まれた時、彼の父は五〇歳を超えており、それで彼は父の長寿を祈ったのである。顧鼎臣の前に黄鶴が現れた時、黄鶴は顧鼎臣の本来の科挙での成功ばかりでなく、その成功が彼の父と共有するものになるだろうということにもめでたくも結びついていた。顧鼎臣の孝行の心は、彼の父が八十歳の時に自分の息子が皇帝に選ばれた状元となったことを見た時に報わ

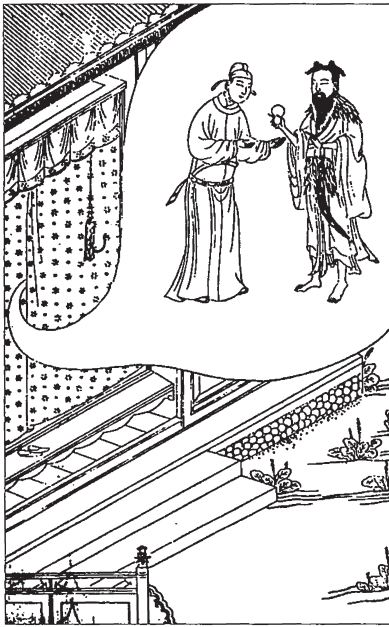


図6.10 仙人が丹薬を贈る（1541年（嘉靖20年）沈坤の夢のビジョン）：顧鼎臣、顧祖訓編、1607年（万暦35年）刊『明状元図考』

れた。そして顧鼎臣は、彼の運命が決して唯一のものではないことを示すために、このようなめでたい出来事の全ての記録を集め続けたのであった¹¹⁷。

沈坤（一五〇七—一六〇〇）は、一五四一年の状元であるが、（図6.10に描かれたように）寝室で眠っている時、最初、めでたい夢であると思われるものをみた。夢のビジョンは、沈坤の寝室の窓から外へ流れ出ており、その中で「仙」（道教の仙人）が沈坤に丸薬を食べさせてくれた。目覚めると胸中にもものがあるかのように感じ、奇妙な、お香のような香りが、部屋を包み込み、人の鼻腔を過度に刺激するようであった。夢の中で、沈坤は明らかに丹薬を受け取った。それは明白に彼を、江蘇北部の淮安郡の彼の出身地からの最初の状元にすることができたものであった。しかしながら、丹薬の完全な効果は、丁士美が淮安出身の二番目の状元になる十八年後の一五五九年まで明らかでなかった。沈坤の胸の中で成長していたものが淮安出身の別の状元となったのである。しかしながら、丁士美が状元になった時、沈坤の政治的な幸運は下り坂になっていた。そして彼は逮捕され、裁判にかけられ、虚偽の罪で処刑されたが、この処置に対しては、沈坤の悪名高い行為や酷く嫌われた性格のために誰も反対しなかった。何が起こったかについての通俗的な見解は、「新状元入朝、旧状元入獄」（新しい状元が朝廷に入り、旧い状元が監獄に入った）であった。編集者は、「荣辱禍福事皆前定」（沈坤の輝かしい成功と不幸

117 『明状元図考』 2.38a-39a。Eberhard, *Lexikon chinesischer Symbole*, pp. 163-64 を見よ。また、Ong, *The Interpretation of Dreams in Ancient China*, p. 112-4 見よ。後者は有名な「赤壁賦」の中での蘇軾の夢について語っており、その中で蘇軾は道教の仙人と鶴を同一視している。

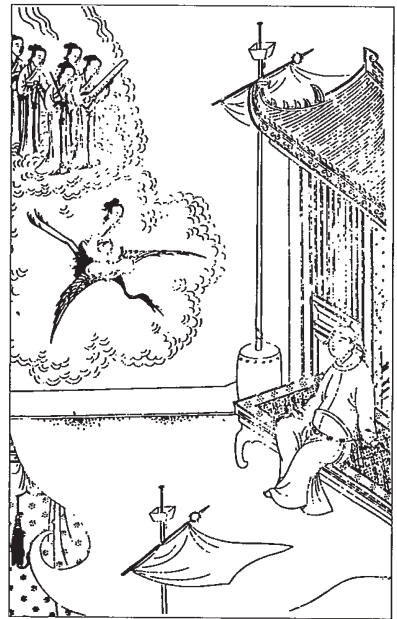


図6.11 道教の仙人が鶴に跨る(1559年(嘉靖38年)丁士美の夢のビジョン): 顧鼎臣、顧祖訓編、1607年(万暦35年)刊『明状元図考』

な結末は定められていた」という観点を追加している¹¹⁸。

しかしながら、興味深いことに、一五五九年の状元になったことに先んずる丁士美自身の夢を描いた図6.11においては、女性の仙人が鶴に乗って黄色い旗を彼に配送するために彼に向かって降ってきている。彼女が降下する時、古典的な楽器を演奏し仙界の音楽を奏でる天上の仙女の一団が空に見える。丁士美に対する神々によるめでたい選択を宣告する黄色い旗が、丁士美の家の門の正面に着いた時、仙人たちは、鶴に再び乗り天上に帰っていく。丁士美の夢の物語には、沈坤の裁判と処刑に繋がる言及は一切ない。我々は、彼が道教に共感していたことを告げられているだけである。異世界への扉は、夢の語りが物語のストーリーラインにふさわしい、それ自身、細分化された文化的構築物であることに結びついてもおらず、それを明らかにしてもいい¹¹⁹。

¹¹⁸ 『状元図考』3.11a-12a。また、Dictionary of Ming Biography, p. 92aを見よ。

¹¹⁹ 『状元図考』3.20a-21a。



図6.12 ハスの花に乗る(1553年(嘉靖32年)陳謹の夢のビジョン): 顧鼎臣、顧祖訓編、1607年(万暦35年)刊『明状元図考』

ここで科挙マーケットという観点から論評されたいの夢と占いの技術は、民衆の崇拝と道教という宗教に結びついているが、『明状元図考』のために、黄応澄によつて描かれた夢のビジョンの我々の提示する最後の例、一五五三年の状元である陳謹(一五二五—一五六)のケースにおいては、仏教の影響が明らかである。塀で囲まれた三棟のエレガントな建物の屋根の上に浮かんだ夢のビジョンの中で、陳謹は、三人の人に囲まれて、瞑想に耽る蓮華坐を組んで、ハスの上に座っている様子が示されている(図6.12を見よ)。すべては空の雲の上に浮かんでいる。そして、夢のシーンは、上方から見られた地上世界に優っている。天から降ってくる雲の上に浮かぶ三人の人物は、仙人、若者と女性である。三人は陳謹をハスの上に乗るように招き、そして陳謹は彼らの願いを受け入れた。彼らが、雲の中に入った時、陳謹は恐れたが、仙人は、彼に「金冠」と「緋袍」を与えた。この二つの品物は陳謹が状元になり、正式に皇帝の前に現れるだろうことを象徴している。

陳謹は最初の恐れを忘れたのち、士人特有の服装をしていたが瞑想中の仏陀のように坐し、心やすらかにそして心を制御して夢のビジョンの中で姿を現している。図版は、秩序と必然性のイメージを提示している。これは、もちろん、凄まじい競争、蔓延る違法行為、そして男性の苦悶の現場として、科挙マーケットを歴史的に描写するという我々の考えと衝突する。仏教徒風の瞑想状態で、ハスの花に坐していることで、陳謹は、異世界へ漂っていき、そして、この世界での成功に対する異世界の人物からの祝福を受け取った。さらに、そこには、資産家一族出身のいかなる少年も耐えねばならなかった、数年にわたる厳しい勉強、記憶力、そして八股作文文への言及は全くない。明代の科挙マーケットという苦難に対する治療的な勝利は達成されたのである¹²⁰。